静岡大学 高柳記念未来技術創造館に行ってきた!

テレビを発明した“高柳健次郎”なる人物が浜松出身だと聞いて、
開発までの裏話をどうしても知りたくなったサトシ。
面倒くさがるミサキを説得して、一緒に訪れた記念館には何があったのか?

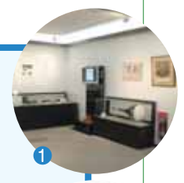
SATOSHI'S DIARY

テレビに初めて映った文字はイロハの「イ」

ホームページで仕入れたネタだけど、「テレビの父」と呼ばれる高柳健次郎は浜松出身で、浜松高等工業学校（現在の静大工学部）の助教授時代にテレビの研究を始めたそうだ。

1926年、世界で初めてブラウン管映像方式で「イ」の字を映し出すことに成功した高柳は、ギネスブックにも載ったというんだから、やはりタダ者じゃない。ちなみに、初めて映す文字を「イ」にした理由は、ものごとの最初ということで「いろは」の「い」とし、図柄の良さからカタカナにしたそうだ。

まずは、開発初期のブラウン管や撮像管などが展示されている❶高柳コーナーへ。昔はこんな❷大きなブラウン管を使ってたんだなァ。フロア中央では、ニポー円板による撮像とブラウン管による表示方法で「イ」の字を映し出す❸電子式テレビジョンの実験装置を試した。これが結構感動もの。いま僕らがフツーに使ってるカーナビやDVD、テレビゲームなんかは、すべて高柳がその基礎を築いたのだ。浜松周辺企業と静大OBが手がけた「日本発・世界一」製品の展示コーナーも面白かったよ。



サトシの日記

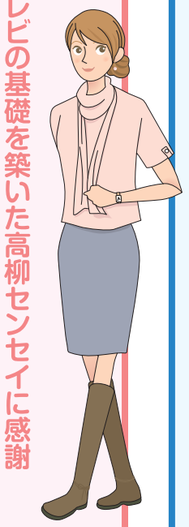
MISAKI'S DIARY

テレビの基礎を築いた高柳センセイに感謝

はじめは乗り気じゃなかった私。サトシは、へんてこな形のブラウン管をしげしげと眺めていたけれど、私にはチンプンカンプン。んもー、時代は液晶ハイビジョンなんだからさー、昔の部品なんてどうでもいいじゃん。

なんて文句を言いながらも、フロアの奥に飾ってある❹いろいろな古いテレビが少し気になった。コレクターから寄贈されたものらしく、3インチの小さなテレビから、白黒、昔なつかしい初期のカラーテレビまでズラリ。しかも、すべて修理してあるから、ちゃんと映るのがスゴイよね。その隣に展示してある現代の携帯テレビや液晶テレビを見ると、画質も含めてテレビもずいぶん進化したんだなァって感動しちゃった。3年後、日本のテレビがすべてデジタル放送になったとき、大国の高柳センセイはどう思うのかしら。

帰る途中、正門付近に建つ❺高柳センセイの銅像を見たら、急に親近感がわいてきて、思わずお辞儀しちゃった。たまには、こんなテクノロジーな（?）デートもいいかもね。



ミサキの日記

静岡大学 高柳記念未来技術創造館【入場無料】

浜松市中区城北3-5-1　TEL.053-478-1402
※火水木金はボランティアガイドが案内、土日は応相談
開館時間／10:00〜16:00
休館日／月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、静岡大学が定める日
交通／車…東名浜松西ICから車で25分
バス…JR浜松駅バスターミナル15番、16番のりばから約20分、「静岡大学前」バス停下車。

オトコとオンナの感覚いったい何が違う?

男女の脳は、その構造の違いから、ものの見方が違う。たとえば、旅を楽しむとき、男はモノのストーリーを聞きたがる。それが、どんな思いで作られて、どんな伝統を創ってきたかを。一方、女は自分ストーリーを紡ぎたがる。これが自分にとってどんなに気持ちいいか、自分をどんなに素敵にしてくれるかを。このため、旅に出れば男は、数字や歴史など普遍のうんちくネタを探し出し、女は、縁が紡ぎだす五感の記憶を重ねていく。

だから、である。「この夕日は最高！あなたと一緒だから?」とロマンティックに浸ろうとする彼女の隣で、「夕日は、空気中の塵に太陽光が乱反射して見えるものなんだ」とうんちくを垂れてしまう彼、なんて構図ができあがる。男女の会話は、すれ違うのが基本なのだ。

そもそも、女が男に感じる不満のほとんどは、彼の個性じゃなくて、男性脳全体の傾向だったりする。パートナーのあら捜ししないのが、幸せへの第一歩！

黒川 伊保子 先生
奈良女子大学理学部卒、（株）感性リサーチ代表取締役。著書に『恋愛脳』（新潮文庫）等。
http://www.ihoko.com/
撮影：瀬戸孝之

Column

知らなかったばっかりに…はままつトホホ話

❶エスカレーターで

浜松の妻の実家に帰省したときのこと。家族でデパートに買い物に出かけ、エスカレーターに乗ろうとしたら、前のオバサマ2人が横に並んでおしゃべりに夢中。抜こうにも抜けない。「ゴッホン」と聞こえるように咳をしてみたけれど、振り向きもしない。首を伸ばしてみると、その前の方にも2列で並んでいる人たちが。エスカレーターでは、急いでいる人のためにどちらか端に寄るのが常識ではないの〜!?

❷盆休みで

盆休みに東京育ちの妻と娘を連れて浜松に帰省したとき、親戚が大勢集まってくれた。70歳になるおばあちゃんが娘の頭を撫でながら「あらー、この子はチンジュウだ。母親に似ただね」とひと言。すると、「珍獣ですって?それってちょっとひどくないですか!」と妻が突然激怒。おばあちゃんはポカンと口を開けたまま…。妻が知らない浜松の方言とは言え、あれは気まずかったなぁ。

❸ウナギの食べ方で

はじめて浜松に家族旅行に出かけた。浜松といえばウナギという訳で、老舗の鰻屋で蒲焼はもちろん、うな茶も制覇。「やっぱり本場は違うわねー」と妻もすっかりゴキゲンで東京へ帰った。ところが翌日、「友達から聞いたんだけど、浜松にウナギの刺身を食べさせてくれる店があるんだって。ちゃんとリサーチしといてよね。まったく、もうっ!」と妻に嫌味を言われ大喧嘩に。ウナギの刺身って本当にあるのかよ…。

❹取引先で

出張で取引先の浜松支店を訪問した。先方の部長と世間話をしていたら、偶然サーファーの話になった。波乗りの経験がない僕は軽い冗談のつもりで、「サーファーって、ひとつのファッションでしょ。みんなチャラチャラしてますよね?」と言った。その瞬間、部長の顔から笑顔が消えた。そういえば、この人、年齢の割にかなり日焼けしているし、髪の毛も少し茶色っぽいぞ…。まさか!と気がついた時はすでに遅し。商談は不成立、トホホ…。

こうすればもっと楽しい！ 浜松人からのワンポイントアドバイス

❶ エスカレーターに乗るとき、東京では右側を空け、大阪では左側を空けるのがマナーと言われている。浜松では2人並んでおしゃべりという光景はめずらしくないのだが、それは浜松には気の遠くなるような長いエスカレーターがなく、エスカレーターを急いで駆け上る習慣がないからかもしれない。郷に入ったら郷に従え、ここはのんびりと気長に待とう。

❷ チンジュウとは、遠州弁（旧遠江国、現在の静岡県西部地方の方言）で「天然パーマ」のこと。決して「珍獣」ではないのでご安心を。いまでも、団塊の世代以上の浜松市民はよく使う。

❸ ウナギの刺身を出す店は、浜松でも珍しく、『うな慎』という店で食べられる。実は、ウナギの血には毒が含まれているので、刺身にするには相当な技術が必要なのだ。詳しくは7ページ参照。

❹ 遠州灘に面した浜松市はサーファーが多い。早朝の海に入ってから出社するビジネスマンはもちろん、波と戯れる若い店舗経営者も多い。彼らにとってサーフィンはファッションではなく、もはや生活の一部なのだ。ビーチクリーンを通して、海の環境を守ろうと活動するNPO法人（マリンプロジェクト＝http://www.marineproject.org）もある。